

山田勝美編

故事成語辭典

山田勝美編

# 故事成語辭典



東京堂出版

# 編者略歴

明治四十二年（一九〇九）、千葉県に生まれる。  
 広島文理科大学文学科（漢文学専攻）卒業。  
 東京大学中国哲学科研究生修了。昭和三年、広島文理科大学より文学博士受領。  
 昭和四十六年（一九七二）、中華学院より名誉博士（文学博士相当）を贈らる。現在、上智大学名誉教授、駿河台学園専任教授、日本書道教育学会顧問。  
 主要著書「新釈漢文大系」「論衡」上・中（下巻は近刊）。中国古典新書「塩鉄論」。角川字源辞典。漢字の語源。中国名詩鑑賞辞典。全訳論語。故事成語辞典。歴代中国名詩選。生きている給文字の世界。その他、多数。  
 現住所―船橋市前原東三―十三―三。



## 故事成語辞典

定価三八〇〇円

昭和五十六年六月二〇日 初版印刷  
 昭和五十六年六月三〇日 初版発行

編者 山田勝美

発行者 岩出貞夫

印刷所 株式会社三秀舎

製本所 協和製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七（〒一〇〇）  
 電話 東京 二三局 三二四一 振替東京 三二四〇

編集協力者

松清秀

一

1539-156228-5164

© Katsumi Yamada 1981

## 序

本書には必ずしも「故事」を有する成語のみに限定せず、かなり幅広く成語を集めて収載した。すなわち、現代語彙の中に、今なお活きているものを中心とし、さらに古典を読む場合の参考に供せんとの意図からである。

いわゆる「成語」とは、何か。それは二つ以上の字（語）が結合して、一つの意味を表すことばのことであり、「成句」といってもよい場合があるが、わが国ではこれを「熟語」「熟字」ともいう。それは古人によつて案出され、かつ使われきたったもので、すでにことばとして、充分に成熟している点からいえば、万人によつて一応は認められているものである。それらのうち、たまたま故事を背景としてできているものを、特に名づけて「故事成語」という。漢字は孤立語で、語尾変化をせず、一語一字であつて、結合して二字、ないしは二字以上の語を構成しやすい特性を具えているが、さりとてむやみに新しく造語をしても、それらの多くは未熟語であつて、簡単には社会的承認を得難く、従つて通用しないことが多い。最近も国電などの広告に「激安」というのを見かけた。非常に廉価とい

う意味で使ったものだろうが、それなら「超廉価」とか、「出血廉価」とでもいったらよさそうなものだが、それでは十分に気持が表せないともいうのだろう。しかし、「安」という字そのものには、もと「安価」「低廉」という意味はないのだから、「激安」という語は、明らかに誤りで、とうてい認められない無知の所産である。また一部のマスコミに、「老年」という語を避けて、「熟年」という語を流行させようとしている向きがある。この語それ自身は、一応考えたものではあるが、「長年」といった成語がすでにあるのだから、今さら「熟年」でもあるまい。このように、それらが成語として、また熟語として広く通用されるためには、言語の法則に合致していると共に、その語の含む内容が、世の共感を呼ぶに足りるていのもでなくてはならない。今日、広く通用している成語のごときは、人これを言い、わが心を得ているていのも、すなわち、我が言わんと欲するところを、彼すでに我に代わって道破し得ているがごときもので、借りてもって、我が思念を託するに足りるがごときものである。従って、これらの中には、人間英知の精粹が込められているものがあり、また一語万金の価値を有するものがある。この点からいえば、これらにはまた、「格言」「金言」「箴言」などと呼ばれるにふさわしいものがある。

人はこれらの成語を駆使することによって、単に自己の教養を誇示するのみでなく、適確な引用によって会話の雰囲気盛りあげ、更に共通の教養を基盤として、人間関係をも深める作用をも果させることが可能となろう。成語の効用をさらに積極的にいえば、それらの中には、処世の指針を与えた

り、岐路に立つての進退の決断を促したり、坎坷不遇の際に志気を鼓舞したりするものなども多く認められ、その効用にいたっては、ほとんど無限といっても、過言ではないほどである。これを書して座右の銘とするもよく、書家はこれらを製作の素材とするもよいであろう。

ここに採用したものは、主として中国古典に基づくものであるが、同一の発想によるものは、必ずしも中国のそれのみには限らない。ことわざに限っていえば、*Dictionary of English Proverbs* と云った書物もある。しかし、ここでは中国のものみに限ったが、驚いたことには、てっきり中国系の成語とのみ思い、かつ使われているものの中に、よく調べてみると、日本製の成語がかなりあるということである。もちろんそれらは、中国古典に基づくものだが、そこに日本人の発想がこもっていて、いかにも面白い。くわしいことは、本書中の叙述に譲るが、「君子危きに近寄らず」「眼光紙背に徹す」「赤貧洗うがごとし」「罪を悪んで人を悪まず」などは、みなそれである。漢字文化圏の中にあつて、同じ漢字を使いながら、中国人の言い得ないところを、ずばり言つてのけているところなど、日本人の聡明さを示すものであらう。

近ごろ、大学の入学試験や、銀行・商社などの就職試験に、故事成語が出題され、出版・放送方面の会社ではもちろんだという。文部省の国語科指導要項にも、故事成語を教えるようにとあるとかである。これらは必ずしもそれらの幹部重役の諸公が明治生まれで、この明治漢学的教養に郷愁を感じているためばかりではあるまい。新聞・雑誌のスポーツ欄などに、よく「弱冠」という語を見かける。

それはそれでよいとして、「弱冠十九歳」であつたり、「弱冠二十三歳」であつたりしては困る。まして「若冠」と書くにいたつては、沙汰のかぎりである。弱冠は、ちょうど二十歳なのである。「礼記」に、「二十を弱と曰う、冠す」とあるように、いわば今日の成人式を経た若者のことである。それならば、いっそのこと弱冠などといった、古めかしい言いかたをやめたらよいのに、やはり依然として使われているところを見ると、そこにはやはり捨てがたい声調・語氣といったものが感じられるためであらうか。会話の中に、故事をはさんだりすることも、必ずしも自分の教養をてらうためばかりとは限るまい。「どっちみち、たいした違いはない」というべきところを「五十歩百歩だ」といい、また「そんなことをすると内かぶとを見すかれるぞ」というかわりに、「鼎の輕重を問われるぞ」といえば、簡潔でもあるし、雅かでもある。こうした成語は、知識人社会のことばであり、教養をなんとなしににじみ出させることによって、われわれの言語生活にバリエイティをもたせるものである。

こうした傾向をふまえて、最近とみに、故事成語といったものに対する関心が高まりを見せ、類書が多く刊行されており、さらには旧版の複刻まで盛んであるが、昭和文運の隆盛として、そのこと自体は慶賀すべきことである。しかし、時勢の進運は、単に従来の書を少し手なおしたり、旧版そのままの複刻では、時代の要請に応じきれまい。すなわち、故事成語といった方面にも、新しい波が起こりつつあるからである。日中関係の進展につれて、例えば「雪中送炭」とか、「名存実亡」とか、「虎と皮を謀る」とかいったような、新しい成語も、新聞や雑誌を通じて、どんどん入ってきつつあ

るのが現状である。本書は、これらについても、できる限り調べて採つてある。これは本書の第二の特色とでもいふべきものである。

さりながら、文海は広深であり、あらゆる成語を一書中に網羅することは、もとより不可能であり、また、どれを拾いどれを捨てるかの基準も、なかなか立てにくい。編者はかつて故事成語辞典を編纂したことがあり、一時世の好評を博したことがあるが、今回改めて旧著を全面的に書き改めると共に、その後収集し得た数百個条を新しく加えて、出典・字句などに校改を施し、東京堂出版より公刊することにした。もとより不備の点が多々あることと思うが、ひとえに博雅の士の批正を仰ぐしだいである。

なお、本書の公刊に際し、鹿児島大学教育学部助教授の松清秀一氏からは、公私繁忙中にも拘わらず、原稿整理などにつき、多大の助力を与えられた。また、東京堂出版編集部の西哲生・松林孝至の両氏には、原稿整理・索引作成・校正などにつき、格別の配慮をいただいた。ともに誌して、厚く謝意を表してやまない。

昭和五十六年六月

山田勝美

## 凡 例

一、見出しの語句は、当用漢字・現代かなづかいにより、その下の「」内の原文は正楷（旧字体）に従い、かつ返点のみを施した。

一、**圈註**は、なるべく現代通行のものを簡潔に示し、数種にわたるものは、①②③などで区別した。仏教系の語句は、特に**囑**とした。

一、**説明**は、意味の部分のみの解説では不十分なものを補完すると共に、難字・難語の説明と、出典などを明示した。出典は、主として原文を平易な口語訳として出したが、時には原文を書きくだし文にして示し、併せて原文をその下に掲出し、さらに解釈を添えたものもある。詩題や文題には、返点・送りがなを施したが、送りがなは当然のことながら、旧かなに従っておいた。

一、**参考**のうち、**囑**は見出し語句とほぼ同じ意味のもの、**囑**は意味の類似しているもの、**囑**は意味の反対のもの、**囑**はほぼ同じ意味のわが国のことわざを示し、いずれも見出し語句の理解を助けるものだけに限って引いた。そ

のほか、見出し語句に直接関連ある事項を、参考までに付記しておいた。

一、**用函**は、すべてにわたってではないが、必要と思われるものに限って、用例を参考までに出しておいた。

一、見出し語句の配列は、「あいうえお」順に従ったが、検出の便を考えて付けた「字画目次」は、見出し語句の書きくだし部分の字の筆画の多寡に拠った。ただし、巻末の「ことわざ等索引」の配列は、やはり「あいうえお」順に従い、それらのいずれも参照部分としては、該当部分のページを表示しておいた。

一、なお、出典の書名・篇名や、人名・地名・年号名などに、読みがなをつけたのは、すでに大方の読者各位が、その読みかたを熟知していることとは思ったが、なお固有名詞であることの注意を喚起するためと共に、少しでも読みやすきたいとの老婆心から出たもので、そのほかに他意はない。

一、また、出典の書名・人名・語句その他に、従来の類書に引く所と異なるものがあるが、本書の編著に当たって原典を参照して、学問的になるべく正確を期したものであるから、本書の所引を一応信用されたい。

## 本書の使いかた

一、見出し語句は、「あいうえお」順に従っているから、いきなりその部分を開かれない。例えば

隗より始めよ

を見ようと思えば、まず各ページの上欄の右か左かにある横書きの「かな見出し」の「かい：」のところを順に繰ってゆくと、八四ページの下段に出てくる。もし

先ず隗より始めよ

を見たいときは、同じように上欄の「かな見出し」の

「ます：」を繰れば、四四七ページに

先ず隗より始めよ↓隗より始めよ

とあるから、↓の下の部分を見ればよい。↓印は、その下の語句を見よという意味である。

一、ところで、「隗」を「かい」と読めないときは、どうするか。従来の類書では、お手あげだろう。改めて漢和辞典によつて、「隗」の読みかたを検索しなければなるまい。本書では、そうした面倒な作業を避けるために、始めて「字画目次」を付けた。「隗」の読みかたが全くわからなくとも、その筆画を数えて、十三画の字であることがわかりさえすれば、直ちに「字画目次」の十三画のところ

を、順に見てゆけば、たやすく検出できる。また、「先ず隗より始めよ」なら、「先」が六画の字であるから、六画の部を順に見てゆけばよい。このように「見出し語句」の、第一字めの画数を数えて、その画数の部を順に繰ってゆけば、本書に収載されている語句は、すべて苦もなく検出できる。これは、従来の類書に全く見られない新工夫であり、本書のいわば特色の一つである。

一、わが国のことわざの中には、中国の成語と、意味内容のほぼ近いものが少くないことは、すでに参考欄に引かれているものによつても、知られるとおりであろう。いま、そのことわざより逆に、それに意味内容の近い中国の成語を知ろうとすれば、巻末の「ことわざ等索引」を「あいうえお」順に繰り、該当部分のページを参照すればよい。

一、なお、各自が検索したいと思う成語で、「字画目次」によつても、また「ことわざ等索引」によつても、どうしても見出だせない場合はどうするか。

実は前記の目次及び索引には、「見出し語句」と「註」とは、そのすべてを収載してあるが、参考の部分の「圖・図」などについては、紙幅の関係で、その大部分が収載されていない。なぜならば、それらには一字か二句かくらいの文字の異同にすぎないものもあるし、また、それら全部の索引を作るとなれば、膨大なものになるから

である。従つて、検索しようと思う語句が見つからないときは、それに意味内容の近い語句や諺をまず検出し、それらの範圍の部分を見てほしい。

一、以上の手續を経ても、なお見出だせないものがあつたなら、著者もしくは編集部あてにご教示をいただければ幸甚である。他日改訂のとき、補遺として付け加えたいと思つてゐる。

一、もう一つ注意しておきたいことは、字画索引を利用する場合、字画の数えかたである。その字が当用漢字に属するものは、もちろん当用漢字の画数に従つてゐるが、

当用漢字でないものは、もとの画数に従つてゐる。すなわち「艹」（草かんむり）は、もと四画であるが、当用漢字では「艹」となつて三画である。従つて

「華」は十画、「落」は十二画であるが、「莫」は十一画、「葵」は十三画

となる。また、「乚」（しんにょう）は、四画だから、当用漢字の「速」は十画だが、当用漢字でない「遼」は十六画となる。以下、これらにならつて考え、該当する画数のところに見つからないときは、画数を一画くらい前後にずらしてさがしてもらいたい。

## 目次

|         |    |
|---------|----|
| 序       | 前二 |
| 凡例      | 前七 |
| 本書の使いかた | 前八 |
| 字画目次    | 前二 |
| 故事成語辞典  | 三  |
| ことわざ等索引 | 五一 |

字面目次

【二画】

- 一衣帶水 云
- 一淵には両蛟ならず 三
- 一牛鳴地 三
- 一月三舟の喩 三
- 一言、尽くし難し 三
- 一言以てこれを蔽う 三
- 一字千金 元
- 一字九遷 元
- 一日之を暖めて十日之を寒す 元
- 一日三秋 元
- 一日敵を縦せば數世の患あり 元
- 一日作さざれば一日食わず 元
- 一日作さざれば百日食わず 元
- 一日の計は晨にあり、一年の計は春にあり 元
- 一日の長 元
- 一日再び晨なり難し 元
- 一字の師 元
- 一字の褒貶 三
- 一時の名流 三
- 一樹の下に宿り一河の流れを汲むも皆これ先世の結縁 三
- 一場の春夢 三
- 一辞を賛する能わず 三
- 一代の文宗 三
- 一人儉を知れば則ち一家富む 三
- 一人の奇語衆楚の咄しきにたえず 三
- 一人善く射れば百夫決拾す 三
- 一農耕さざれば民に飢うる者あり 三
- 一罰百戒 三
- 一馬の奔る一毛の動かざるはなし 三
- 一面の交り 三
- 一網打尽 三
- 一目瞭然 三
- 一葉の落ちるを見て歳の將に暮れんとするを知る 三
- 一葉目を蔽えば太山を見ず 三
- 一陽來復 三
- 一粒万倍 三
- 一利を興すは一害を除くに若かず 三
- 一蓮託生 三
- 一路平安 三
- 一を挙ぐるに三を反す 三
- 一を聞いて十を知る 三
- 一を識りて二を知らず 三
- 一介の書生 三
- 一家富貴なれば千家怨む 三
- 一家を機杼す 三
- 一竿の風月 三
- 一氣呵成 三
- 一騎当千 三
- 一饋に十起す 三
- 一簣の功 三
- 一丘の貉 三
- 一挙手一投足の労 三
- 一挙兩得 三
- 一簣を以て江河を障う 三
- 一大形に吠ゆれば百犬声に吠ゆ 三
- 一見、旧の如し 三
- 一狐裘三十年 三
- 一口に出ずるが如し 三
- 一刻千金 三
- 一榮を博す 三
- 一死一生及ち交情を知る 三
- 一視同仁 三

- 一 紙半銭 元  
 一 瀉千里 元  
 一 将功成りて万骨枯る 元  
 一 倡三嘆 元  
 一 笑に付す 元  
 一 触即発 元  
 一寸の光陰軽んずべからず 元  
 一世の木鐸 元  
 一隻眼 四  
 一隻眼を具う 四  
 一旦緩急あれば 四  
 一簞の食、一瓢の飲 四  
 一知半解 四  
 一簞を輸す 四  
 一張一弛 四  
 一朝一夕の故にあらず 四  
 一長一短 四  
 一丁字を識らず 四  
 一朝の忿りにその身を忘る 四  
 一擲乾坤を賭す 四  
 一擲千金 四  
 一頭地を出だす 四  
 一刀兩断 四
- 一波動けば万頃随う 四  
 一髮千金を引く 四  
 一は竜一は猪 四  
 一飯の徳も必ず償い、睚眦の怨みも必ず報ゆ 四  
 一斑の美以て全豹を察すべし 四  
 一臂の力 四  
 一顰一笑 四  
 一夫関に当たれば万夫も開く莫し 四  
 一辺倒 四  
 一片の永心、玉壺に在り 四  
 一以て之を貫く 四
- 【二画】  
 九牛の一毛 三  
 九死一生 三  
 九仞の功一簣に虧く 三  
 九層の台も累土より起こる 三  
 七去 三  
 七擒七縱 三  
 七尺去って師の影を踏まず 三
- 七頭八脚 三  
 七年男女席を同じくせず 三  
 七年の病に三年の艾を求む 三  
 七歩の才 三  
 十行俱に下る 三  
 十字街頭に笛を吹く 三  
 十年一覺す揚州の夢 三  
 十年一劍を磨く 三  
 十目の視る所、十手の指差す所 三  
 人琴の嘆 三  
 人口に膾炙す 三  
 人後に落つ 三  
 人才輩出 三  
 人山人海 三  
 人心の同じからざる其の面の如し 三  
 人事不省 三  
 人事を尽くして天命に聽す 三  
 人生意気に感ず 三  
 人生行路難し 三  
 人生字を識るは憂患の始め 三
- 人生は朝露の如し 三  
 人生は夢の如し 三  
 人中の竜 三  
 人面獸心 三  
 人面桃花 三  
 人遠慮無ければ必ず近憂有り 三  
 人衆れば則ち狼を食う 三  
 人衆ければ天に勝つ 三  
 人肥えたるが故に貴からず 三  
 人常に菜根を咬み得ば則ち百事懈すべし 三  
 人に口事を授く 三  
 人に因って事を成す者 三  
 人に千日の好なく、花に百日の紅なし 三  
 人に求むるは己に求むるに如かず 三  
 人の己を知らざるを思えず、人を知らざるを思う 三  
 人の患は好んで人の師爲るに在り 三

字面目次(二画～三画)

- 人の聞くなきを欲せば言う  
なきに若くはなし 四〇七  
人の短を道う無かれ己の長  
を説く無かれ 四〇七  
人の涕唾を拾う 四〇七  
人の鼻息を仰ぐ 四〇七  
人の將に死せんとする、其  
の言や善し 四〇七  
人は惟れ旧を求め、器は惟  
れ新 四〇八  
人は足るを知らざるに苦し  
む 四〇八  
人一たびしてこれを能くす  
れば、己はこれを百たび  
す 四〇八  
人は万物の靈たり 四〇八  
人能く道を弘む 四〇八  
人を射るには先ず馬を射よ  
四〇九  
人を得る者は昌え人を失う  
者は亡ぶ 四〇九  
人を知る者は智、自らを知  
る者は明 四〇九  
人を見て法を説く 四〇九  
人を以て鑑と為す 四〇九
- 人を以て言を廃せず 四二〇  
刀圭家 三五四  
刀筆の吏 三五四  
二河白道 三七六  
二千石 三七七  
二千里外故人の心 三七七  
二桃三士を殺す 三七八  
二免を逐う者は一免をも獲  
ず 三七八  
二卵を以て干城の將を棄つ  
三七九  
入幕の賓 三九〇  
入木三分 三九〇  
入るを量り以て出ずるを為  
す 四〇九  
八荒 三九四  
八斗の才 三九四  
八面玲瓏 三九三  
匕箸を失う 四〇三  
力山を抜き氣は世を盡う  
三三三
- 【三画】  
千公、門閭を高大にす 四〇  
下学して上達す 四〇  
下愚の性は移すべからず
- 六  
下問を恥じず 二〇三  
于将莫邪 二〇九  
己達せんと欲すれば人を達  
せしむ 二〇九  
己に克ちて礼に復る 二〇九  
己に如かざる者を友とする  
こと無かれ 二〇九  
己の長に伐らず 二〇九  
己の欲せざる所は人に施す  
こと勿れ 二〇九  
己を捨てて人に従う 二〇九  
己を虚しうす 二〇九  
己を以て人を度る 二〇九  
弓折れ箭尽く 四七  
口尚お乳臭 二〇四  
口に蜜有り腹に劍有り 二〇四  
口はこれ禍の門 二〇二  
口を衝いて出ず 二〇二  
口血未だ乾かず 二〇六  
口耳の学 二二一  
口舌の争い 二七三  
口中の雌黄 二七三  
口頭禪 二七四  
口頭の交わり 二七四
- 口吻 二九  
才余り有りて識足らず 二九七  
才子佳人 二九八  
才人 二〇〇  
才貌衆に出ず 二〇一  
才藻 二〇〇  
三跪九叩 二〇六  
三軍も帥を奪う可きなり  
二〇六  
三徑 二〇七  
三顧 二〇七  
三綱五常 二〇七  
三才 二〇七  
三三五 二〇七  
三思 二〇九  
三豕河を渉る 二〇九  
三舍を避く 二〇九  
三十にして立つ 二〇六  
三十の幅、一轂を共にす  
二〇六  
三十六策走ぐるを上計とな  
す 二〇九  
三寸の轄 二〇九  
三寸不律 二〇九  
三省 二〇九

- 三千大千世界 三〇〇  
 三千の弟子 三〇〇  
 三刀の夢 三二一  
 三人行えば必ず我が師あり 三二一  
 三年園を窺わず 三二一  
 三年父の道を改むること無きは、孝と謂り可し 三二一  
 三年蜚ばず鳴かず 三三三  
 三釜の養い 三三三  
 三不惑 三三三  
 三分鼎足 三三三  
 三昧 三三三  
 三余 三三三  
 三令五申 三三三  
 三たび思いて後に行う 三三三  
 三たび脇を折りて良医たるを知る 三三三  
 山雨来らんと欲して風楼に満つ 三〇六  
 山河襟帯 二〇六  
 山家村 二〇六  
 山中の賊を破るは易く心中の賊を破るは難し 三三〇  
 山中曆日なし 三〇〇  
 山東、相を出だし、山西、將を出だし 三〇〇  
 山鷹河帶 三三三  
 山明らかに水秀す 四七三  
 山有り水有り 四七三  
 山高きが故に貴からず 四七三  
 山高く水長し 四七四  
 山に蹟かずして埜に蹟く 四七四  
 山に猛獸あれば林木これが為に斬られず 四七四  
 山を樂しみ水を樂しむ 四七四  
 之を沾らんかな之を沾らんかな 一九四  
 之を嚙うに鼻を以てす 一九五  
 子は父の為に隠す 一九五  
 子を易え骸を析く 一九五  
 子虚烏有 三三七  
 子を知るは父に若くは莫し 一九六  
 士は己を知る者の為に死す 三九  
 士別れて三日なれば、即ち更に刮目して相待たん 三九  
 尸位素餐 三三三  
 尸祝、庖に代わる 三〇〇  
 尸 禄 二四四  
 女は己を説ぶ者の為に容る 三三三  
 女子と小人とは養い難しと為す 二五二  
 女丈夫 二五三  
 女の髪を以て象の脚を絆繫す 二五  
 小人窮すれば斯に濫す 二五五  
 小人の過つや必ず文る 二五五  
 小人閑居して不善を為す 二五五  
 小人の腹を以て君子の心と為す 二五五  
 小人の交は甘きこと醴の若し 二五五  
 小心翼翼 二四六  
 小水の魚 二四六  
 上材を求むれば臣は木を残す 二四六  
 上知と下愚とは移らず 二四六  
 刃を迎えて解く 四七〇  
 寸陰を惜しむ 二六八  
 寸指以て淵を測る 二六八  
 寸進尺退 二六八  
 寸草春暉 二六八  
 寸鉄人を殺す 二六八  
 寸馬豆人 二六八  
 寸を調げて尺を伸ばす 二六九  
 千金の裘は一狐の腋に非ず 二六八  
 千金の子は市に死せず 二六七  
 千金の子は堂に垂せず 二六七  
 千鈞の弩は鼯鼠の為に機を発たず 二六七  
 千鈞の弩を以て潰癰を射る 二六七  
 千鈞も船を得れば則ち浮ぶ 二六七  
 千載一遇 二六八  
 千山万水 二六八  
 千秋万歳 二六九  
 千秋楽 二六九  
 千丈の隄も蟻蟻の穴を以て潰ゆ 二六九  
 千緒万端 二六九  
 千人の諾諾は一士の諄諄に如かず 二六〇

